

横井小楠 —その業績と生涯—

事件は、文久2年(1862)12月19日、江戸で起きました。この日の夜、小楠と吉田平之助・都築四郎は吉田の別宅で酒を酌み交わしながら懇談していました。すると突然数人の曲者が襲ってきました。刀が身近になかった小楠は宿舎の越前藩邸に刀を取りに行き、急いで現場に戻って来ましたが、吉田らは瀕死の重傷を負っていました。事件の状況について小楠の自宅宛手紙(同年12月21日付)をもとに一部を再現してみます。

15 小楠暗殺未遂事件

「私(小楠)は、近日中に京都に赴く肥後藩江戸留守居(江戸藩邸に勤務し、幕府や諸大名との交渉や連絡・情報収集などを行う)吉田平之助と面談の用事があったので、12月19日の夕方4時過ぎ、檜物丁(現東京都千代田区八重洲)にあった吉田の別宅を訪れました。そこに都築四郎・谷内蔵允(いずれも肥後藩士)も加わり、用談後、2階で別れの酒宴を開きました。途中で谷は帰りましたが、夜8時を過ぎた頃、突然覆面抜刀した2人の曲者が掛け声もろとも2階に駆け上がってきました。2階の上がり口際にいた私は、不意のことであり、床の間に置いた大小の刀を取る間もありませんでした。もう1人の曲者が階段を上がって来ましたが、刀を持たない私は、身をかわして素早く階段を降り、10丁くらい(約1km)離れた宿舎の常盤橋越前藩邸へ駆け帰り、差替えの大小を取って現場に戻って来ました。しかし、曲者はすでに退散した後でした。吉田は瀕死の重傷(のち死亡)でした。都築も手傷を負いましたが、命に別状はありませんでした。」

小楠は傷を負って倒れている吉田・都築兩人を肥後藩邸に送り届け、一通り事情を話して越前藩邸に帰りました。そして、翌20日、小楠は事故の届書を肥後藩邸に提出しました。

ところで、小楠らを襲撃した刺客(曲者)3人は一体何者だったのでしょうか。肥後藩重役沼田勘解由は事件の翌日、越前藩中根雪江に「昨日、龍ノ口(肥後藩邸)詰の足軽兩人(黒瀬・安田)が亡命し、吉田を斬りに行くと申ししていた。」と告げています。このことから刺客

の2人は分かりましたが、もう1人は事件の3か月後に判明しました。文久3年3月22日、京都南禅寺裏山で自殺した一浪士があり、死に際して着ていた白衣から肥後藩を脱藩した足軽の堤松左衛門と分かりました。堤は肥後勤王党の宮部鼎蔵から武道を、同党の轟木武兵衛から学問を学んでいました。堤の白衣の血書に「江戸に居る売国の士横井平四郎を斬らんとしたが失敗した。故に自刃して国家に謝す。(要約)」とあったことから、この事件は開国論を唱えている小楠と江戸留守居の吉田の暗殺が目的で、勤王の感化を受けた堤が首謀者であったと思われます。

さて、小楠は刺客に襲撃された時、傷ひとつ負いませんでした。それ故、敵に立ち向かわずに友を死地に残し、独り脱出したのは武士にあるまじき振舞いで、士道忘却だとの非難が肥後藩側に相次いで起こりました。そこで、肥後藩では直ちに越前藩邸より小楠の身柄を引取り、送還することを決めました。一方、越前藩では事件直後から善後策をたて、肥後藩重役の沼田勘解由に会いましたが、沼田は小楠を肥後藩邸に引取り謹慎させたいと伝えて来ましたが、それを聞いた松平春嶽は直接沼田に会い、「小楠は沼山津に閑居して居れば無事であるのに、自分が無理に招聘し、また深く信頼していたばかりにかかる災難が勃発したのだと思うと、甚だ気の毒にて心痛に堪えない。肥後藩の掟をかれこれ言うべきではないが、どうか自分の心中を察して寛大な処置に及ぶよう」と頼んでいます。